

申請者:大平修司

論文題目 活動補完型非営利組織の新たな方向性
—高齢者福祉施設のソーシャル・イノベーションの創出と普及—

審査員 根本敏則
谷本寛治
松井 剛

本論文は、これまで市場・政府の失敗を補完する役割のあった非営利組織(活動補完型非営利組織)の新たな方向性を、高齢者福祉施設を事例として、ソーシャル・イノベーションの創出と普及という点から、理論的・実証的に検討した研究である。

本論文が評価できる点は、以下の二点である。第一に、先行研究がほとんど存在しない中で、他の分野の既存研究の成果を踏まえた上でソーシャル・イノベーションの創出と普及を分析するための理論的枠組みを構築し、事例分析を行なうことで、新たな研究分野を開拓したという点である。

第二に、本研究では二つの高齢者福祉施設を事例として、ソーシャル・イノベーションの創出と普及を分析している。ソーシャル・イノベーションの創出に寄与し、その普及を推進した社会的企業家へのインタビューを基に、図書、雑誌・新聞記事、政府や行政機関の報告書、ソーシャル・イノベーションの創出と普及にかかわる組織の内部資料など、多くの情報源からの資料を検討することで、その普及プロセスを丁寧に描き出したという点が評価に値する。

一方で、本論文の課題として、以下の二点をあげることができる。第一に、本研究では様々な研究分野の成果をレビューし、ソーシャル・イノベーションの創出と普及を分析するための枠組みを構築したわけだが、既存研究の成果を十分に消化し、それらを基礎として独自の視点からの普遍的枠組みを構築できたわけではない。新たな研究領域を分析するための枠組みを構築するのは容易ではないが、今後とも緻密に既存研究の検討を行い、ソーシャル・イノベーションの理論的意義を考察することを通じて枠組みを進化させるべきである。

第二に、本研究ではソーシャル・イノベーションの普及についての分析を行なっているが、普及時点の現象だけを検討するに留まり、普及の動的なプロセスを描き出していない。ソーシャル・イノベーションの普及が組織間でどのように広がっていったのかなど、より詳細な相互作用のメカニズムを明らかにすることで、より説得力のあるソーシャル・イノベーションの普及プロセスを明らかにすることができるであろう。

以上のような課題を残しているものの、本論文の貢献はこれらを補ってあまりあるものである。よって、審査委員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮し、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。